



中村俊定文庫
文庫 18
157



寶永四

繪大名

格枝

東戸を明て出給ふ　ひろき人わをかくれ
里　あなめくとかこりけん　やふれ　府の
かなめよりむまぶお^もひをくまのはの
うらみかひせし　二見浮　いせの、かひの
むまき　昔きやう　かすかや　小車一の
われうもものよ　くろおとを　彼祐成の
かよひつま　そのおをえんし　千多の帝
月あはよ　うくれめの洞よ　くまをむら
くもは　雨を　起して　鳴神を　いそ中

ばさげしまし 己の日記をうへゆかし
ひの折をたのんか河やいくせを分
てあし折後をせうく スットンとんとん
とろそはしと、うつろちけん杖の下
よりと 歎と感 忍とありげに世間
のうき事とおとほざるこそまざるはれ
せふをやりつ、あひまゝなる 亦逢さうの関
守よ ひとよをゆるせ とま^ままじし 一百
夜とりこつ通ひ路を とびるる声は你
の夢の夢中も急のこぶさ 吠出に を

あろくく 獨川のほとことばや伏
見の里に明わたる よめが君の心のうち
千、あひしとはのたまはて 油ちをう
につき給ふ

右此光陰の及ぶを 穴よりと一軸は
て吾子の跡を送るれ けよや 梓屋も
あけせまきまを 如何なる 穢嫌もやあり
けん 何うき水の窓をとり ちかく 嵐革
の歎くうつけても 秋をうけ 眠を挽されは尾



と断 歯をともくむ事をつし子無ある風
俗とやと其品を付て酒鴈を流ふ独酌に

格枝亦字す

いつを昔に

格をうつして

風よとやぞ 馴染ん冬おたり 甚角



佳期

十二支よ春禊の風をうしし 格枝
千代の数 風が塩や 杉の旁 菊陽

官城

雪れおや 風と鹿れ杉産より 遊祖
運上を羊々として 冬 福すみ 隈子

祈 丑

あなうせや 芥一枯の尻れゆき 浜分
朝日照る 雪れ根深ん起さいさ 山夕
印火白くふりちう曲のぬすみ哉 九阜

所名

染糸よと枯たて鳥此大ぬおみ
 其日啼く遠くへ深の木此葉簞
 室嘆よさし下の礎此ぬみ
 おきしり此大江山あり大根引
 茅舎買水
 千柳

氷舌く偃鼠か咽をうらふせり
まきま

寄開路

物音を盗人さうお小叔志んれ
 眉丘
 哀判を葉より引連しん不破の園
 夏夜

遊戯

寄れ枕より悔氣よけし嵐也
 秋色
 晴て花を狂ふ声あり玉あふれ
 宮凍
 侍育やぬの字造て筆凍る
 棹歌

花祝

うげをうて夕車以や子の月夜
 白老
 家の内よたまる音吹や丸舞
 東潮
 老氣簞篋の下や表忍侍
 山芝

穿壙

於此舞をゆるさし歌の声
 遊祖

鍛下

大黒の鼻をあまりそ扱の舌
種物の葉形よくさよおろくべ
母屋ふすま 束喰いよあらせよ
格枝

衰

気もろろ月のおすみや冬の肌
辛部婆より火燧よ体玉嵐哉
乱紫

幼

おぬおふ 一口ゆかみいつこまて
石棟

倉有餘糧

山里の冬を醋藏のねずみ尻
尻きると為嵐や雪のおま
牛町と志ろくや蔵の冬むもり
尾をさすり 齒を磨也おろ声
涼筋
川棟

述懐

移る世におろの嵐や種ちすび
つれなきや夜前 蠟燭紙子喰
おろやけやゆすみよ破る、火吹介
山芝

措穴

波子雁瓦よみろれみろろ、桶や米
格枝

形中

あまくちり宇宙をせしナギサ窺舟の窓 東海
糸線の下よぬるむむ竹管のゆき 桐子

家潤

白岩を橋よりもや白ゆきみ 岩翳
ねまつりや印あむとら口ずさみ 伴詔
猫猫のない都うつりや冬ふり 沾風

旅情

本陣の嵐をきし まき柱 出紫
煙這ふゆきみ大根のしなのなる 初立

畫藏

かくける南へまごぶ月子丸 春凍

聞法

浅筒とちびを嵐冬かまへ 千山
木うらしや椎も尾ほその宮嵐 菊陽
しん天よ荒陵山の油さし 尺樹
嵐にをみくを標尾の粘 和推
年の尾や般若の竺此 鹿喰 専吟

市中

浦辺の冬毛とよや松のまじ 東老
美美をちかあまうれとよは波 来示

又鐘ヤスリのいて、齒のうくねむ子成
立永

旦

朝まき圍炉裏の跡や懐千と
遊祖

東巻

ぬくめを中よねむ子の啼声哉
貞佐

雪の淵や鮎のつとる 芥川
梅雷

往來

細殿やとら、此齒音ゆきの音
又魚

仙家へは北扉頭巾の市用尺
朝水

いか栗よ冬此音あり 君か道
箕峯

偶息

笠よおれ嵐と雪は 姿あり
菊陽

妹が戸や嵐ふくして 冬がま
眉丘

白嵐 是西王母か足袋喰ひ
喬谷 喬

鯉汁や嵐友たち 唐此音
鴻漸

そむうし 雪此芭蕉や雨繪筆
北郎

きき子此孤島の綿とうからし
山芝

藝をよみ撥をいそぐ狂ふ

袖飼の風俗尺ありんちんれ哉
格枝

寵毫

妹がくちを麗の足^足りさよ千を 其角
花浣蒲やおとえぬ人を粟の夏 格枝

翻盆

久年一母又その里なり中く寺麗 思向

楓橋の波泊揺あかし^あの春

うしき山寺此いづ^{いづ}くとも

を大音寺へうつし^{うつ}くとも

麗の筆を扱ふ

必斬遊

菊好や冬をこのころ鐸せり

秋色

老中辟衣を緋入の上

格枝

風雲の残際とちり色付て

左海

いとりてゆかぬ鋸又縄

貞佐

耐ある月と麴の棧嫌よく

泊洲

縮た千し筋の女かはりまを

菊陽

體撥く還城樂の朝旁又

枝

自脈をとるを下戸の未来記

色

二里三里不断換して怒らも

佐

嵩思へ湧る是生滅法

洲

?

聞番の身も動かさぬ時
 柑子の後よ小車一の切
 允遠よ賣了急呼風は尔良の時
 合天井をぬるめ 宗 麩
 旅の月手下の座落違ふ車
 あまの川原よ我を木男
 是作きくを幸やがも須磨の花
 三日取と砂を出たり
 名
 次の写る陰よ成へき青きとひ
 けきを敷そお玉たれのを丹

枝色 佐洲 陽流 枝色 流陽

西より又皇帝の教とたむ出入
 本手へゆくぬ 芥子の唇
 杉の察 柿下の察もわく足駄
 齋を呼して 井筒業平
 小中及きしてを運ぶおもて啓
 なるとも 畫^畫ぬ城の蝶 風
 口上のたはねをやく天とそれ
 川よとをぬれ 血をぬる
 十五段の虹をとれ 河州の原
 轉能助を麻よまきく

流洲 佐枝 色陽 洲流 陽佐

千々の秋 ひとりの粟は剥かざる
 あふききるさよ二を二枚もつ
 おたし顔山坪をせりて暑衣
 羽二重なれく脱音を聞
 花の陰をやくまつく観あり
 油を付て通る 暑風
 洲陽 枝流 色佐

おれ復の扁

二ふさや朝日をとくむ冬牡丹
 水仙よなを分引 やり月秋
 東潮 甚角

纏たをる 身を待まのる 蘭式 格枝
 浩ゆふや童ねかさぬる 露の楯 遊祖
 みそれとる 合の末 此茶之式 菊陽
 水仙や傾國の名々 夏まごま 楓江
 いさをやよ 枇杷 説文の物をもん 思河
 石菖の寄とかれはや 水の露 甚角

琉球の産よ 霸王樹をまん
 花をなく 春秋をわらす だ
 炎暑をうれしく 枝を生ず

とかや 姿を 簪子の 袋を 胡
瓜の 膚にかきぬ なま豆の 俵
もある也 藪を 下路しく 留
よ 折を ちかき おんがり 竹を
負ひ 蕨を カよ 浪花 まで
り 懐^懐ん 足さを やすん 今江
川の 地を ちかむ 深が 形容
を いかい 地 たて どの 厚れを 儲
よ あらず

漬粕よ 埋きぬ 衣や さつほてい 格枝
杵の 走りの かいつ あり 行 貞飯
髻 ちとと さか けう けい 山を 見て 白雪
黒風 折よ ぬけ穴を もむ 菊陽
灰吹の ナケ 輪を 望 旅の 月 遊祖
密柑の 方り 米計の ちむ 陽
小屋 組を 切 篋と 穿へ ちむ 陽
富士の 下とち 当分の 事 枝
なむ ぬを 浮を 韃へ ぬめり 佐
家中 牡丹の 名を ちむ 祖

土器よ入る 献立をわたりかす
 わせた澄濠を貞征り崎
 星織の穴も逢招とあかき
 月よとそめし 塩物の程
 秋風の吹よつけても尾上谷
 てんと従才よ似る新佛
 花の山 秤をたし窓と雨し
 何を嗅やら 独活を堀家
 後() 淋() き人の馬刀
 流し買うは 蠟よ落着

風 雲 枝 佐 祖 空 風 陽 佐 枝

晝間さへ 紫足袋う空へむく
 四分一 三把 おとひ乱る
 袖に神 何うたを 包菓子
 実よまかれ 旬官ちり
 貉穴の 伯母の 孫へおみ
 鐘のわたり 冬海とひがき
 ありむけは 孫 雷 いま 朱肉橋
 椽棍の 志いれ 苦かり 風
 流川と くるめ 月と
 帙も 此 いき 子

之 風 祖 陽 風 佐 陽 枝 空

残

天然のまゝいさうつほわ語なく
 衣の珠をぬぐは 小使
 岩を喫 箴をぬぐ 舌を昏
 揚枝当うと ちりちりの松
 四つ時の踏鞴はさかしく 花盛
 夕べのはげをさかさるゝ 蝶

陽風 枝 佐 祖

題 混雑

雪山画歌

拾得の几巾にかかむや玉帯一其角

雪や 紅梅 今朝 雪しめつ 雪と 雪や 旅 真釣 温 門内	鯉を 心つか 見ま りめつ ちり日 やむ 為木 釣と柳 飯 内へ	菜汁 かうや 若菜 ぐれの と日和 一 のとゆる 柳の 糸 ちり 浮世 入	おぼ か病 好 梅見 やま 梅の花 燕 子 月 路	泊洲 格枝 秋色 菊陽 貞佐 淡々 遊祖 存棟 思間 格枝
----------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------

市間喧

つげ木屋のふらふら足取り雨蛙
 屯守を合點てある盲 白老
 敷入や雨の芦辺此隅 格枝
 山里々人をあぐれの屯足子 甚角
 鷲尾の詰状をたす 屯の友 北垣

含香亭

釣鐘をもちす心ぞ白くせん 冠里
 牡丹復瘧の蓋ほど心せよ 今
 若くは親の甲よひよろつくふ 今

砂を目子寐さめを洗へ 鵲 甚角
 申宿よおのけ刀をふとぎん 眉丘
 吉次也明荷の中此夜か 東寺
 八合の鶉此風干す あつき成 北観

重五

まゝ木々の夜狩寧き懺り 浜江
 兼房よ喰おてはこいて甲番 格枝
 天窓をたれうおさして 蛸の声 東流

隆

太刀をたき金入を着て 鯉丸 浜江

手間得人や 中たの田舎に綾瀬川 千山
とくくと帯を艦綱 かの峰 格枝
み子あゝるや 心有間の湯女が棒 思間

愛娘子

鶯啼て卵吸ふ 蚊をなうり 其角

宝珠池塘

鴨の子や 東遊いの 左良細工 格枝

高田眺望

下関や 見ぬとろに しのまろが嶽 遊祖

乞巧

瀧飛のけろりと 後やほし使 吾中

息灯や ぼりの林に 瓜をかき 真佐

星合や 屋の棟川を 伊勢近江 翠風

明星や 額よ おつる 鞠ほころ 其角

舟はたは 新しきよは 天の川 菊陽

送りや 喰をば 桑名の帆 船舟 眉丘

發声

立はや 赤踊の中に 三輪の杉 貞佐

飛たつや 裾を引つりて 烏鳳 白雪

うねさの五寸よ 足るや ちまき 澄心

樓臺を肩の冷し狭賣 春深

澤菴讀徒羽塞。偶著作一字三字之説。上中下君臣父母

中

夫婦兄弟僧俗不相通之義也。後逢赦再帰江府。不為放嶋望郷之魂。而得東帰林之喜。幸矣哉。

讀中総吟

きさ深の月や流人の心すけ舟

とちつたつ

夕々として宗起て月の宮 甚角

月尺式高根の空に消し定家 遊祖

橋杭の臍當し老よ月の人 格枝

大杉のせいこくまろ月取式 思同

饅頭の奸を入りまふの月 捨草

新月やあふれまの玉つをき 木棟

織部印本

新月の馴染志をく木賦筒 格枝

未曉

鏡つきよ階子に立て見る菊は
對の底又旅人を寝て菊と文
朝家や出羽同行の菊此家
温草の期と多ふにも菊成田
隈子

後月

嵯峨のくに餅の音して十三夜
一くせ々今も倉町月の豆
武士のぶきふまこりず女と々
秋色

埃情の絶にゆけたと云
とある何は旅を定て

今々我伊勢糸子の小取十卷
かけわたす菓とりと知ぬ風
生妻湯に表の梅此うきとて
五尺の籠をぬけて佐保娘
蛛のみに月又明て毛羽ふくり
鞋を穿てて類又質米
戸袋のいつそにけくは山極
そお天
款足せに白果 臨次走山つれ
蝙蝠や武士 持るをのきお
流し
菊陽
法州
尺樹
格枝
執筆
貞佐
白雲
法州

白粉の東へ ちろり朝急ひす 青流
 十石を盤了つく也 龍安寺 其角
 山並み何ふくふ引いを念佛 昌貢
 和習や 隨の替古よ 雉子眠る 汰臣
 捨人のための切とく 燧くぬ 其角
 あらむふ や 忘登のから 崎川漫 松枝

雑司がよ 遊小

大根をいまや引 くらむおの闇 貞佐
 新敷敷の子よ 粉の子よ ぬ月 松枝
 遠山を青換の皴よのし 付て 菊陽

松毛おかくやう奴 十人 佐
 皆ふくく借切る音や 違ひ 松枝
 手細 さばきを衣張よあり 湯

衣粒柱 ふくよぼうすき 日和式 全
 植虎や 介よけ 菜地乃志る人 松枝

宝永丁亥 臘月下浣

彫工 吉田宇右衛門



